取り上げ、かなり詳しく説明することにしました。この枠に関しては、熊本大学の医学系の准教授と講師の先生方に担当してもらうことにいたしました。

小児科の病気に関するニーズは依然として高く、テーマを決めての説明一ページとQ&A形式の半ページを、中村公俊先生と三渕浩先生に担当してもらっています。また、女医先生を中心に女性医療人のエッセイ欄である「癒しのまなざし」も人気があり、刷新後も残しました。

そして、当該年度からは「まいらいふ」の医学記事は、一定期間後に肥後医育振興会のホームページに公開するようにしました。つまり、医学情報がホームページ上に蓄積されていくわけです。将来は大きな医療情報タンクになることが期待されます。この件に関しては、過去の「まいらいふ」の記事であっても今の時代に耐えるものであればホームページに載せていこうと考えています。特に、小児科に関する記事は多岐にわたっていて、しかも日常子供に何かあった時に医学情報として役立つので、ホームページ内に集積させる必要があると思っています。

ところで「まいらいふ」で問題になるのが広告です。優良企業の業績不振から当初の広告スポンサーがどんどん撤退を余儀なくされ、健康関連企業の広告が多くのページを占める結果に陥って、一見しただけでは記事なのか広告なのか判然としないようなケースも出てきてしまいました。われわれ肥後医育振興会の「まいらいふ」担当者はしばしば広告の部分と記事部分の明確な区域分けが必要だと主張していますが、広告代理店の方は背に腹は代えられないというのが実情のようです。

常任理事（庶務担当）　山本　哲郎

第十回人体解剖学実習セミナー・熊本開催される

熊本大学名誉教授（前形態構築学教授）　児玉　公道

熊本大学大学院医学薬学研究部の形態構築学分野（旧解剖学第一講座）は、夏季休暇中に、人体解剖学研修を行う機会を設けています。この企画は肥後医育振興会の助成と後援を得て実施されています。

二十年度第十回人体解剖学実習セミナーは、八月十八日（月）から八月二十九日（金）までの二週間、熊本大学医学部総合研究棟二階解剖学実習室で開催されました。全国から二五名の参加者があり、今年は第四クール目の第一回目であり、主に頚部と胸部体壁、上肢および背部の解剖を課題として取り組みました。熊本大学の形態構築学分野で開発された解剖術式に則って胸腹部皮下の前皮枝と外側皮枝の剖出から始まり、頚部では広頚筋さらに胸鎖乳突筋を明らかにするとともに上方に翻転して頚神経叢を根から分布領域まで隈なく剖出観察しました。また腹直筋とその支配神経を明らかにして、頚部での舌骨下筋群とその支配神経である頚神経ワナとの相同関係について考察しました。続いて鎖骨を丸ごと除去し、腕神経叢と上肢の動脈を剖出し、その形態について様々な変異系列が存在することを確認しました。最後に胸壁の解剖では、熊本大学方式と呼ばれている、胸骨を正中で半切し、肋軟骨と肋骨を骨抜きにして肋間筋と共に胸壁を観音開きする術式に従って開胸を行いました。

人体構造について同胞の遺体を解剖し観察理解するのは、通常医・歯学部の教官か医学・歯部の学生に限られています。この企画は〝広く医学医療に関わる人達にも解剖学実習の門戸を開き、実際に人体を解剖し且つ解剖学者による人体の見方や課題を学習し、それぞれの分野での教育・研究・医療実践に生かす〟という目標が掲げられています。医学医療が細分化し高度先端医療が求められる中でも、人体の成り立ちや諸構造を有機的に把握することは益々重要になっております。つまり大樹の先端に位置する葉を理解しようとするときに、樹全体の理解の上に立って考える視点が大切です。各器官と周辺の局所関係など実物を見なければとうてい理解できないことを、この研修では十分に剖出観察できます。そして構造の成り立ちを含め人体の精緻さと複雑さを深く勉強することができます。ヒトの身体を大きく捉えることによって、それぞれの研究分野で新たな発想や視点が付け加われば大変すばらしいことだと思います。

このセミナーが今後一層充実し、熊本大学の特色の一つとして全国の医学研究者が解剖学を学ぶため熊本大学に集うようになれば、さらに素晴らしいものになります。このセミナーをこれからも継続し、医学研究者や医療従事者にとって意義のあるものに発展させていくつもりです。本セミナーは全国的にもその意義を認められ、大学の社会的貢献としても注目されております。

なお第十回セミナーの内容を知りたい方は、報告集が僅かありますので、形態構築学分野までお尋ねください。

「熊大病院群医師卒後研修プログラム研修医育成」の助成に関する活動報告

熊本大学医学部附属病院総合臨床研修センター　前センター長　興梠　博次

肥後医育振興会から「熊大病院群医師卒後研修プログラム研修医育成」に対して平成二十年度に助成をいただきましたので活動報告をいたします。

新しい卒後医師臨床研修制度が開始されて、大都会の研修医が増加し、熊本県の研修医が減少しました。ただし、九州では熊本県は福岡県に次いで研修医数の獲得ができています。日本における平均的医師数の確保をするためには、熊本県では年間一一六名が必要ですが、現在一〇〇名を若干越える程度で、今後、熊本の医療に負担がかかることになります。そこで、少しでも多くの研修医を熊本県にて育成するために、私達は、熊大病院群卒後研修プログラムの説明会において、各病院の詳細な説明、「地域保健・医療」における地方病院での地方貢献型研修システムの確立、救急研修の中核病院乗り入れ方式指導システム、等を企画し実行しました。

この過程の中で、医学生と研修病院との相互理解を深めるために、研修病院のスライドプレゼンテーション、研修病院の個別説明会、研修医の研修成果発表会、研修修了式、等を開催し、医学生、研修医、指導医を含めて、みんなで医師を育てる環境作り、社会が医師を育てる環境作りを目指しました。

これらの活動に、肥後医育振興会から助成をいただきました。肥後医育振興会の目的にマッチした助成と高く評価し感謝申し上げます。また、会員の皆様からのご寄附に感謝申し上げますとともに、今後とも継続的なご支援をよろしくお願い致します。

第三十二回蛋白質と酵素の構造と機能に関する九州シンポジウム

熊本大学大学院医学薬学研究部　分子病理学分野　今村　隆寿

平成二十年九月十一日（木）から十三日（土）まで阿蘇リゾートグランヴィリオホテルで第三十二回蛋白質と酵素の構造と機能に関する九州シンポジウムを開催しました。九州内の大学をはじめ岡山大学や京都大学の研究者および学生、さらに化学及血清療法研究所等の研究所の研究者を加えた一〇八名の参加があり、盛会で成功裏に終えることができました。本シンポジウムが生物の基本となる蛋白質と酵素を研究主題とするため、参加者は医学、歯学、薬学、農学、工学、理学系の学部に所属、あるいはその卒業生で各個人が異なった知識と経験をもち、その研究は生化学、遺伝学、微生物学、免疫学、細胞工学、発生学、創薬、腫瘍学等と領域が広い。今年は本シンポジウム発足に多大な貢献をされた元九州大学農学部教授、故船津勝先生の功績を讃える追悼講演を皮切りに、特別講演二題、一般講演八題、ポスター発表四七題が行われた。特別講演、一般講演の内容がペプチド合成、クロマチン構造、ファージディスプレイ法、蛋白質導入法、HLA—G蛋白質、蛋白質X線結晶構造解析、スフィンゴ脂質代謝酵素、古細菌ピオチン化反応、トランスグルタミナーゼ、生活習慣病予防と多種多彩でしたが、どの演題にも活発かつレベルの高い質疑応答があり、参加者はシンポジウムの醍醐味を堪能しました。例年の二倍の演題申し込みがあったポスター発表は二カ所に分けて発表を行ったにもかかわらず懸命な発表と熱心な討論は二十二時過ぎても続き、学生に発表の場を提供し多方面から指導を受けさせるという本来の目的を充分達成できました。多くの参加者があったミッドナイトセッションと懇親会では、類似の研究を行う者は勿論、異分野、異領域の研究者、学生も懇話を通して知識や情報の交換を行いかつ親睦を深め、今後の共同研究等への進展が期待されました。本シンポジウム開催にあたり多大なご支援をいただきました財団法人肥後医育振興会には深く感謝し御礼申し上げます。

「フォーラム二〇〇八：衛生薬学環境トキシコロジー」の開催ご報告

熊本大学大学院医学薬学研究部　環境分子保健学分野　教授　高濱　和夫

本フォーラムは、三十四回目を数える日本で最も歴史のある毒性学・健康科学に関する学術集会の一つで、二〇〇八年度は『健康をまもり、健康をはぐくむ』をキャッチフレーズとして十月十七日（金）～十八日（土）の両日、熊本市民会館および熊本市国際交流会館において開催しました。

特別講演の演者に、満屋裕明教授（熊本大・院・医学薬学研究部）と遠山千春教授（東大・院・医学系研究科）を迎え、それぞれ「いのちと健康を守る：性感染症としてのAIDSと治療薬開発」および「疾患解明への環境毒性学からのアプローチ」と題してご講演を戴きました。また、加藤貴彦教授（熊本大・院・医学薬学研究部）には、「個人差を考慮した予防医薬学—分子疫学への期待」と題して教育講演を戴きました。さらに、「メチル水銀の生体影響と毒性発現機構」、「脂肪酸の分子栄養学」、「新制度における衛生薬学の教育と研究」、「栄養素としての微量元素とその安全性」、「身の回りの科学・非（偽）科学」の五つのフォーラムを企画しました。一般口演は五二演題（韓国から一題）、ポスター発表一四五演題（韓国から二三演題）で、いずれも過去最高の演題数となりました。加えて、環境・衛生部会賞の二題の受賞講演も行いました。総参加者数は韓国からの二六名を加えて四〇四名に達し、これも過去最高となり、韓国の研究者を含めて活発な討論・意見交換と交流が行われました。懇